

昭和二十六年九月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

（通第三十号）

慈光

第三卷・第九號

目次 み佛を讃へまつる 〔1〕

- 超世のひかり 花田正夫 〔2〕
聖親鸞を語る 福島政雄 〔6〕
わが兒 波岡茂輝 〔9〕
尼提の救済 蓬戸閑人 〔21〕

み佛を讚へまつる

み佛にあひまつらんは、はかりなき時に、ただひとびぞ。もろもろのさはりを超えて、ひたすらにみ法をうけよ。

われらすでに煩惱のはてしもなくて、苦しみの海きはもなければ、み佛はみ慈悲もて、きよらの国をあらはしたまふ。

み光の一に無数の佛ましまして、限りなきてだてをもちて、われらをばすぐひ給うてうむことなし。

み佛の身はきよくしてしむかなり。み光はなべての世を照せども、まことはしむかにしてすがたなし。

けにみ佛の境界ははかり難し。尽くるなきみ教を、よく一つの御声もてのべたまう。

このみ声、くまなくひびき、人々は器にしたがひてよろこびをえ、おのがじみ教をわが身一人のためと思へり。なべて世のたのしみのうち、きよきしずけさにしくものぞなき。み佛の室にけがれなく、み佛の眼さながらに世を照します。

よろづの国々は、み佛の一毛の中におさまり、み佛の大慈悲は、大空のごとひろやかなり。

われらのたかぶる心は山の如きも、み佛は智慧と方便の力もてくだきたまふ。

限りなき時を重ねて行を修め、愚かなるわれらの闇をのぞき給ふ、み佛の智慧こそまことの大灯炬なれ。

はかりなき時の昔、生死のなやみ永くつくし、われらにきよけき道をあらはす、み佛の慈悲こそまことの大船筏なれ。

生よ死よ、老よ病よ、憂き悲しみのたえせぬわれら、ひとたびも御佛の光にあへば、心きよけき世界に入らん。

広大なみ佛の国、深き功德のみちてかがやき、けがれなきみ佛の子等多く集ひて、常にみ法の声にききいる。

み佛は師子の座にましませども、あらゆる塵の中にもいます。

数々の行をしめし、不可思議のてだてめぐらし、佛の子をきよらの国に導びき給ふ。

嗚呼きよらけきさとりのくによ、はかりなき功德の海よ。縁ある人等これを聞かば、道を、求めて遂に勝れし身とはならん。

華嚴經。新訳聖典より抜

超世のひかり

八月初旬に信友西元宗助さんの來訪をうけた。丁度二十年振の対面である。目下、氏は京都の百萬遍寺の善導院に止宿して西京大学に勤務されてゐるが、終戦の時は満州の建国大學に勤められてゐたため、その後ソ聯に抑留生活満三年にして帰國せられたのである。

今から二十三年も前のことである。西元さんは私と共に京大哲学科に学んでゐた頃から佛縁深く、羽溪了諦先生の經營されてゐた佛教寮の知四明寮に入られて、私共と共に池山先生を訪ひ、その後とくに福島先生の慈育を慕ひられて長年月過ぎられたのであるが、敗戦前の在満生活において家庭問題に行き惱まれ、全生活が暗黒となられて、諸行無常、是生滅法、即ち「いろはにはへどりぬるを、わがよたれぞつねならむ」まではうなづけるが、生滅滅已、寂滅爲樂、即ち「うるのおくやまけふこえて、あさきゆめみじゑひもせず」といふ後の句はどうしても読めない、世間虚偽の暗さは見えて、唯佛は眞のひかりが射さぬ。こうしたことで遂に現実生活の崩壊と理想の破綻とでもいふものに衝き当られて四苦八苦の末に、不思議にも唯佛は眞の御心におさめとられたとのことであつた。其後抑留生活を終へて無事に帰還せられたのである。

るが「御苦勞様でした」といふ言葉を隨所で聞き、始めの程は「如何にも自分達は内地の人達のはかりしけれぬ苦勞をしたのだ」といふ風に感じてゐたが、よくよく考へて見ると「抑留者ばかりが苦しんでゐるのではない、内地の人達も、或は主人を失ひ、或は家を焼かれなどして矢張り苦海にあえいでゐるのだ。更に抑留者が苦しむばかりでなく、抑留してゐるソ聯人も苦しんでゐるのだ」といふことが知れて来て、今頃は「お互いままで」と答へてゐることであつた。

私はここに「世間虚偽」に徹せられた西元さんの言葉、「人生そのものが苦なのです」との一句をきいて深く身にしみとほるものがあつた。

大無量寿經の始めにある、讀佛偈の中に

光顔巍々 さやかに晴れます御顔の

威神無極 氣高さ神々しさの極みなし

如是燄明 そのみひかりのとうとさは

無與等者 この世にならぶものぞなき

日月摩尼 日のひかり月のひかりも

珠光燐耀 宝珠のたえなるかがやきも皆悉隱蔽 みなことごとくおぼはれて

猶若聚墨

墨かとばかりかけもなし。

の句がある。世間を解脱し給ふ佛の御徳の自然の耀きのまへに、世間にある一切の光といふ光が皆ことごとくその光明をおさめて、恰も墨のかたまりの如くなつてしまふとのところである。佛陀の超世のひかりに照し出されて始めて「人生そのものが苦である」と信知せしめられるのである。そこに苦の全体の上に限なく佛の眞実の御涙が注ぎに注がれてゐることを信管せしめられるのである。これは全く佛智の不思議の世界である。

我々の煩惱に狂ふ者の心は決してそうはうなづけぬのである。例へば私は一年餘り痼疾のために門外不出の生活をして居るが、これから先何年続くかも知れない。そう云ふ病苦に直面すると、自分独りが広い世間で苦しんでゐる、外の人達の苦勞は軽い、贅沢な苦勞であるといふ風に感じ、何でも早くよくなりたい、そうすれば從前の活動も出来る、親しい信友にもお目にかかる、そこには楽しい世界が展けると、こゝ言ふ夢がやまない。然し仲々思ふやうには行かぬから愚痴がおこり、自分ばかりが苦しんでゐると思ふから、外の人々に同情を要求する、そして一喜一憂を続ける。

然し、すでに佛は「有る者は有るで苦しみ、無き者は無いで苦しむ」とかねてより仰せられてゐる。そのことは言葉ではよくわかるが實際の生活の上では仲々そう思へない。だから病治れば治るで又しても他の色形の異つた苦がつきまとつて来ることは一応も二応も知られながら、見はてぬ夢にひ

私は今、この消息を最も鮮やかに知らされるキーサゴタミー救済の物語を想ひ浮べる。釈尊の御在世の時であつた。キーサゴタミーと言ふ婦人が一人の愛兒を失つた。この母の心は狂ひに狂うて、天使の眠むるが如き死顔をした、未だ温みの去らない愛兒の死骸を抱いて、街の医師といふ医師を走せ廻つて「誰かこの兒を再び蘇らせておくれ」と叫び続けていた。街の人々はこの母の悲痛極りのない狂乱の叫びを聞き、或はちらひ泣きし、或は顔をそむけ、或は合掌して、遠まきするばかりであつた。そのうちに誰言ふともなしに「お釈迦様のもとに行け」といふ声がひびいて來た。

狂乱の中にもこの声が聞えると、キーサゴタミーも始めて釈尊の深い智慧と慈悲を想ひ浮べてその御前に走せ参じた。「み佛よ、智慧とはみなく、慈悲限りないお方と承つて居ります。どうか愛兒を失ひました哀れな母のために、再び兒を蘇らせて下さいませ、お願ひ申し上げます」

と涙の中に一心にお願ひした。釈尊はこのあはれむべき婦人の心境に限りないいくしみを垂れ給うて

「汝の心情をあはれんで死兒を再び蘇らせるであらう。それは一合の芥子の実を持ち来れ、然しその家は未だかつて人の死んだことのない家からでなければならぬ」

と仰せられた。キーサゴタミーは街中の家といふ家を一軒残らず訪ね芥子の実を乞うたが、芥子の実のある家はあつても、かつて人の死んだことのない家は何處にも見出されなかつた。或は父を失ひ、或は夫に先だたれ、或は孫を葬ひ、或

きづられて行く。あだかもそれは、人間の眼のもつ錯覚と同様である。同じ長さの箸を丁字形に置くと、同じ長さであると百も千も承知してゐながら、矢張り「一」は短く「一」は長く見える。佛の教へ給ふ通りであると知らざながら實際はそう思へない、これが煩惱具足の身の持つ錯覚であり、迷妄である。

世の中を夢とみつみはかなくも

なほおどろかぬおのれにあるかな

西行法師の悲しみもそこにあるやうである。かくて行けども行けどもはてしない泥沼の旅が続き、走れども走れども出られない、袋街の迷路におちる。南無三・出やうのない袋街、浮びやうのない泥沼、それよりほかにありやうのない自己につきあたるとき、「唯佛是眞」の光が射して下さる、然もその光は遠い昔からこのことをかねて見抜かれて、遙かなる未来まで照りに照り、護りに護つて下さる慈光と信知せしめられる。

ここに痼疾にして再起の覚束ない私が、そのまんまに無限のやすらぎとなぐさめを惠まれ、同時に「世間虚偽」と知らしめられる。即ち人生そのものが、紙の全体を墨でぬりつぶしたやうな暗であり苦であると知らしめられ、佛のかねての仰であるところの、人生は苦海であり無明であり火宅であり無常であると大いにうなづかしめられると同時に、私ばかりでなく人間世界の全体がほとりのない苦海であると佛の御慈悲の光の中に照し出されて参る。

は数人の愛兒を失つた家ばかりであつた。やがて夕陽は西の山に沈もうとして四辺が薄暗くなつた頃、疲れきつて足が棒のやうになつキーサゴタミーが、悲歎と絶望のはてに、始めてフト氣付いたのが「人生は無常である」といふ一句であつた。ここにキーサゴタミーの心眼が佛陀の善巧によつてやうやく開け来つて、狂乱の心も段々とおさまり、佛前に帰り来つて、

「み佛様、私が愚かで心闇いたために無理なお願ひを申し上げました。人生の無常といふことを始めて氣付かさせて頂きました」

と申し上げた時、佛の御眼にあはれみとよろこびの涙があふれ給うた。その慈容を仰いだだけで、直ちにキーサゴタミーの心は完全にひらかれて、生死を超え給ふ佛に帰依し奉ることが出来たといふ話である。

又最近お会ひしたYさんといふ医師の方がある。不治の病魔にかかりて、御自身が医師であるからその状態をよく知られて、はからずも死に直面せられた。するとヘタヘタと參つて丁うて生きて行けなくなつた。何一つ頼みにするものがなくなりて、生き杖を失つてしまはれたのである。

それからといふものは、この人と思ふ人に、あふ毎に「君はどうして生きてゐる、何を頼つて生きてゐるのか」とたゞねたづねせられたそうである。ところがそなると誰も答へて呉れない。

「或日かねて信頼してゐる丁先生にそのことを聞かれると、
「それは白井先生にきくがよい、そのことで一番苦労した方
だから」と答へられて、白井先生を待ちに待たれてゐた。然
し思ひかへすと三十年も前に医学校時代に白井先生から歎異
抄を承つてゐたが、卒業後は没交渉に過してゐられ、又歎異
抄も殆んど読むことも無しに来られたさうである。
幸にも七月末に白井先生の来名を機会に、待ちに待たれた
Yさんは、先生の御顔を見、自分の心境の苦悶をさらけ出さ
れるなりに、南無阿彌陀佛／＼と念佛の人と転ぜられた。一
道会館にも来られて、池山先生筆の「一心正念にして直に來
れ」の振り仮名「オネガヒダカラ、スギキテオクレヨ」の佛
間の額を見られて、有り難いですなあ、有り難いですなあ、
南無阿彌陀佛／＼としきりに随喜せられてゐた。死に直面せ
られて地上に一点の光もないことを痛感されたYさんの暗黒
の胸に、尽十方無碍の光明が射しこんで、破闇満願せられた
風光であつた。

相対虚偽の暗黒界に、煩惱によつてかもし出される錯覚と
迷妄に狂うて、道なき山に分け入りて、なき慰めをたゞねわ
びてやまぬ私共に、その故にこそ救ひ遂げばおくまいとあ
らはれ給うた、絶対眞実の佛の生きたおまことが徹到すると
ころに、人生全体が聚墨の如きことを照し出されて、そのま
んま無限の慈悲に包みとられて参る。これが現在の私にとつ
て唯一無二の救ひの大道となつて下さるのである。

年来耳の底に深く刻まれてゐる金言であるとのことである。
私はこの一句をいよいよ身に沁みて味はせて頂くばかりで
ある。煩惱無尽の私は、よきにつけ、あしきにつけ、よろこ
びにつけ、苦しみにつけ、常にそれにひとつかりづめである
た。それが二十六歳の夏のことであります。

尤もその二三年前から親鸞聖人の事を書かれた書物な
らんか読んでもありました。二十台の初の頃であります。二十一
二、三歳といふ頃に多少親鸞聖人の関係のものを本で読んで
居りました。親鸞といふ方はどういう方であるか、少し考へ
るようになつてをりましたけれども、はつきり心持が決まり
ましたのが二十六歳の夏からであります。

その親鸞聖人の御教の道を、どうやらこうやら三十六年も
迎らせていただいて御覧の通り今では白髪が一ぱい生えると

聖 親 鸶 を 語 る

福

島

政

雄

一、聖人と私

親鸞聖人への御縁が何時の頃から私に開けてまゐりました
かと申しますと、今から三十六年ばかり前であります。私の
二十六歳の夏に始めて親鸞聖人への信仰が私の心に開け、親
鸞の御教唯一つをいただいてゆく、こういふことに決りまし
た。それが二十六歳の夏のことであります。

尤もその二三年前から親鸞聖人の事を書かれた書物な
らんか読んでもありました。二十台の初の頃であります。二十一
二、三歳といふ頃に多少親鸞聖人の関係のものを本で読んで
居ました。親鸞といふ方はどういう方であるか、少し考へ
るようになつてをりましたけれども、はつきり心持が決まり
ましたのが二十六歳の夏からであります。

その親鸞聖人の御教の道を、どうやらこうやら三十六年も
迎らせていただいて御覧の通り今では白髪が一ぱい生えると

然しこの超世のひかりによつてひらけて来る明るさとよろ
こびはそゝ長く続くものではない。若しその法喜に溺れ執着
して、もう大丈夫だ矢でも鉄砲でも來い、信仰の力で萬事を
テキバキと片付けて行けるなどと思ふなれば、すでに信仰を
我物顔にして、それを利用してうまく世を渡らうとする世渡
り佛法に墮する。「念佛者は無碍の一道なり」と聖人は仰せら
れてゐる。この無碍を障りがなくなつてしまふことだとど
と大きな間違ひである。またどんなさはりでもやつて來いと
力むことでもない。それでは佛と同じさとりをひらくことで、
無碍もいらぬ。無碍といふことは何處までも有碍でしかあ
り得ぬ私の上にあらはれて下さる佛智である。佛慈である。そ
こに障りをそのまんまとかし転化して下さるのである。
私は何時も何時も煩惱のぬかるみにおちて、愚痴と腹立ち
と貪慾の境界に沈んで行くが、何か問題につきあたつては佛
の慈悲にひきもどされて行く。私の佛心に立ち帰らされるの
は時々であるが、佛心は常恒不斷の御慈悲を注いで倦み給ふ
時はない、その御力がましまさばこそ狂ひに狂ひ、濁りに濁
る私の心も恆におさめとられるのである。丁度子が親を憶ふ
のは時々であるが、親の心は子から離れることが無いと同様
である。

またやりそこない、またやりそこない

それだからお呆れないお慈悲でないか

の一句は、近角常音先生が兄君常穎先生から承られて數十

が、そう言ふやりそこないのやまぬ私故に、飽迄もお呆れの
ないお慈悲を感佩申すばかりである。

昭和二十六年八月廿日

いふ年になつてきてをりますのであります。しかしその二十一
六歳の夏に心持が変ります少し前述は私はどんなことを考へ
てをつたかと申しますと、親鸞聖人の御教はまるで解りませ
ずに兎に角お念佛といふやうなことは、之は頭に白髪が生え
てそろそろ棺桶に足を入れるやうになつたお年寄にはいいか
も知れませんけれども、自分のやうな若い者には何の関係も
ないと、こういふふうに思つてをりましたのであります。そ
んなことを考へまして解らずにお念佛といふやうな事を輕蔑
してをつたといふやうな次第であります。それがそういふふ
うに心持が開けてまゐりましたのは、これは皆さんは御承知
ないかも知れませんが、その頃東京に近角常穎先生が非常に
御熱心に眞宗の御信心をお説きになつてをりましたが、近角
先生のお話を私の友達に勧められるままに聞きにまゐりました
た。それも自分が聞きに行かうと思つてまゐりましたのでは

なくて、その頃叔母に当ります者が大変苦しんでおりましたので、その叔母を案内していつて私はお話を聽かない積りであつたのであります。それを友達が叱るやうにして先生のお話を一度聽かないと申しますので、仕方なしに叔母の後について近角先生の求道学舎に行つたのであります。

そこで信仰上のお話を聽きました、その時肝心の叔母、之は御信心のお話を聽きたいといふので参りました肝心の叔母はあんまり感じなかつたらしいのであります。然るにお念佛のお話なんか自分に用はないと思ひながら仕方なしに聽きました。私がすつかり近角先生のお話を感じてしまひました。是が私の二十六歳の春三月二十二日、丁度聖德太子の祥月御命日ではあります御命月に当ります二十二日のことであります。こうしてその時からこの信心のお話を聽きに行き度いといふ心持がおきて参りました。

時々に聞きに参りましたが、その夏の七月の始に夏季求道会といふのが催され、一週間程御懇意なお話を聽きましてか

ら、私の心が開けて参りました。開けて参りましたのは、つまりそななお念佛を軽蔑してなりました私が、殊に私は小さい時から何にもお念佛の空氣の中に育つたものではありません。郷里は熊本縣でござりますが兩親はどちらかと云へば儒教思想、と申しますと孔子や孟子の教なれば解る、佛教は解らぬといふやうなふうでありますので、ちつとも小さい時から佛法の御縁は無いやうなものであります。青年時代にな

るだらうかと思つてをりましたが、その時から一遍に解る、解るといふのは皆さん御承知であります、何も一字一句の言葉が解つたといふではありません。彌陀の誓願不思議それが解つてきたと申しませうか、私の心にひびいてきたと申しませうか、逃げて逃げて逃げまはつて仕様のない私を、何處までも追ひかけて下さる、自分というものを何時もあれんで見て下さる、何處までも誠をもつて私を見て下さるといふその佛のお慈悲といふものがその時から私の心に通じ始めたといふ次第であります。それから親鸞聖人の御教の道だけである、自分の道は之より外ない、こういふことになつて参りました。

二、聖人の求道

その後だんだん聖人に親しんでまるりまして、聖人の御伝記も多少調べたり致しましたのであります。御承知の通りに聖人は御家庭の上では非常に不仕合せであつたのであります。四歳の時に御父君に生き別れ八歳の時に御母君に之は死に別れであります。四ツや八ツで父親母親を失ふ、是は人間にとっては非常な不仕合せであります。そういう不仕合せな事に幼年時代、少年時代にお会ひになつた、それから九ツで叡山にお入りになり二十年御修行になつた。その二十年といふのはどんない御修行になつたか詳しいことは解りませんけれども大体の見当はつくのであります。

これは聖人の御内室の惠信尼公の御手紙で解ることであります。

りまして日蓮上人のものを読んだりしてをりました、そんな関係であつたのですから、御承知の通り日蓮上人は念佛無間、お念佛申せば無間地獄に陥るといつてをられます。その日蓮上人の心持が多少私に移つてをつたのであります。兎に角お念佛を軽蔑してをりました。それが夏七月の始め一週間ばかり熱心なお話を聽くうちに何時の間にか私の心持が變つて参りました。

七月十一日の夕方星の輝く頃であります。私の下宿してをりましたのが今のが明治神宮の裏手に当る處であります。そこを下宿の方へ帰つて参ります時に、自分の心持が變つたといふやうなことを感じました。それから下宿に帰りまして八疊の間に落着いてみると、南無阿彌陀佛の御称名が自然と口に浮ぶ、それが私の小さい時からお念佛の空氣に育つてゐるとすれば別に不思議はないかもしませんが、ちつともそんな空氣の中に育たないで青年時代には寧ろお念佛を軽蔑するやうな心持であった者が、そんなにお念佛申すやうになることが不思議であります。

この時から親鸞聖人のお言葉の「彌陀の誓願不思議にたすけられまゐらせ、往生をばとぐるなり」と信じて、念佛まふさんとおもひたつところのおこるとき、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり」と歎異抄の一一番始めにおつしやつてゐられる。あんな処がしみじみと心に通つてひびくやうになりましたのであります。今迄も歎異抄は少しよんでもりましたけれども、こんなものが自分の一生涯に解る様にな

ますが、聖人は叡山にお入りになりましてから堂僧といふ役目をしておいでになつた。堂僧といふのはどういふ役目をするものであつたかと申しますと、叡山にお登りになつた方は御承知であります、あの叡山に釈迦堂といつて釈尊を御本尊とした大きな御堂がありまして、その釈迦堂の前の方少し離れてをりますが、其処に俗に弁慶担い堂と云つてゐる兩方に小さな御堂があつて橋が架つてをりますが、弁慶のやうな大力の人は担ぐことが出来るといふことを誰かが考へたものであります、それで弁慶担い堂といつてゐるものであります。その一方が常行堂、私はその内に這入つたことはありませんけれども、その中には阿彌陀如來を安置してあります、阿彌陀如來の廻りはグルグルと廻られるやうになつてゐるそうです。

そうして叡山ではもとは九十日引續きの御念佛、念佛三昧の行と申しましようか、そういうことが行はれた、といふのはその小さな御堂でありますけれどもその御堂の中で、阿彌陀如來の御佛像の廻りを廻りながら一すぢに阿彌陀佛を念佛ながら、丁度釈尊の觀無量寿經の中で韋提希夫人にお説きになりましたやうに極樂淨土といふものを次から次へと想ひ浮べる。

始めに夕日の光り、夕日がすつと西の海に沈む、そういうふ処をじつと心に考へてみよ。それから海の水がみんな凍つてしまつたと考へてみよ、瑠璃色に綺麗な色に凍つたと考へてみよ、といふやうなことから始まつて瑠璃色の地面の上に七

重行樹と申しますか、金・銀・珊瑚・琥珀・瑪瑙の綺麗なもので

出来た樹木が立つてゐる。八功德水といつて、冷たからず熱からずといふ水が湧いてゐる池があるとか、その池の側にそこに宝塔がある、その中に佛様がいらつしやる、こういふやうな事を次から次へと想ひ浮べてじつと心にはつきり浮ぶやうに想ひ浮べてみよ。これは十六の法といつて釋尊が韋提希夫人に極樂淨土を心に想ひ浮べる順序をお説きになつたものであります。つまりこういふふうの順序であります。

常行堂の阿彌陀佛の佛像の廻りを巡りながらその阿彌陀佛の御淨土を心にはつきりと想ひ浮べる、そういふ修行であります。それを一つの期間九十日間毎日つづけたものだそうであります。後にはだんだん時間が短くなつて一番短い時には七日間迄短くしたそうでありますけれども、兎に角そういうふ念佛三昧の行がそこで行はれた。聖人はこの念佛三昧の行を行なさる人の一人であります。念佛三昧の行をするのが堂僧といはれてゐたやうであります。聖人はその堂僧の一人として叡山に二十年間もお過しになつた、こういふことであるやうであります。これは惠信尼公の御手紙にあることでありますからして確実なことと考へられるのであります。

そういふ修行を主としておいでになつた、それでありますからして、叡山の内では後には姿だけ僧侶の乱暴狼籍の連中が集つて山法師と呼ばれた善くない事ばかりしてゐた時代もあります。しかし堂僧と呼ばれる人達は叡山がどんなに乱れた時に於ても極く眞面目な修行をした人々であつたやうであります。

御伝鈔で御存知の所であります。

御伝鈔の第三段でありますか、有名な所であります、これは御伝鈔に出てをりますと共に今のお手紙にはつきり出てをります。こういふふうに出てをります。「聖德太子の文を結びて示現にあづからせ給ひければ」——何のことかちよつと解りにくい言葉であります、聖德太子の文を結びてといふのは聖德太子の磯長の御廟に大分古い時代から伝へられてゐる所の太子の廟窟銘の七字づつ二十句ほど書きました偈文を申します漢文で書かれた歌のやうなものがあります。その二十句の偈文、太子廟窟銘とも言つてあります、それを繰り返し繰り返し口ずさんでおいでになつた。「聖德太子の文を結びて」といふのは聖德太子の御廟の二十句の銘文といふものを繰り返し繰り返し口ずさんでおいでになつた。その中に夜明け方、つい座つたままで、ちよつと三分鐘そこらであるが居眠りをなさつた時に夢のやうにして觀音のお告げがありました。その觀音のお告げ、それが「示現にあづからせ給ひければ」といふお言葉がそれであります。「觀音様の御示現」、觀音様を目の前にみるやうにして現れておいでになつて、お告げになつた。それが御伝鈔に出てをります四句の偈文といはれてをります、御承知であります。

行者宿報設女犯 我成玉女身被犯

一生之間能莊嚴 臨終引導生極樂

佛法の修行をする人が、普通佛法修行といへば結婚なんかしないで独身ですごしてそれで修行をつづけてゆくといふの

す。

その一人として聖人は叡山ですとお勤めになつたのであります。けれども聖人はどうも心持が開けぬ、そこで色々苦しんで色々の道をお求めになつたらしい。詳しく解つてをりませんけれども普通に伝へられてをります所では十九歳の頃には奈良の方においでになつて奈良の佛教の色々な宗派の色々の方面の教をお聽きになつて河内の磯長に聖德太子の御廟があります。その磯長の太子の御廟におこもりになつた、こういふことが伝へられてをります。十九歳といへば大体人間が所謂青年時代になつて色々な心の問題を惹き起す時であります。随分苦しみの問題なんかを惹き起します時であります。その頃聖人は聖德太子の御廟におこもりになつた。それから後の十年間も今の念佛三昧の行を主としてお過ごしなつた。なかなか御心持が開けぬ、そこで二十九歳の時にどうしても心持が開けないから一つこういふ願を立ててやり通してみた、といふのは京都に六角堂といふのがあります。六角堂の御本尊は觀世音、觀音様であります。その六角堂に百夜籠らう、つまり六角堂に毎晩々々こもつて御本尊の前に結跏趺坐してそして御經を読んで読み通し夜明けまで徹する、それをづつとお續けになりまして九十五夜の曉でありますから、九十五番目の夜の夜明け方であります。そんなに毎晩毎晩御本尊の前に座つてお經をお読みになると、矢張りおつかれが何となく出て来たのであります。多分そのお經を読みながらウトウトとなさつた、こういふふうに私は考へます。これは

が普通だけれども、その修行者が結婚生活、女と関係する結婚生活に入るといふやうなことがあつても、其の場合には觀音様が自分が玉のやうな女となつてその行者のために妻となるであろう、そうしてその行者を一生涯よく体も心も立派にさせて行つて、そうしていよいよ臨終となつたならば、その行者、即ち佛法修行者を導いて佛様のお淨土に往生させてあげよう、こういふ意味のものであります。そういふ觀音様のお告げといふ形で聖德太子のお心持が聖人の心に通うてきたわけであります。そこで聖人は心の落着を得られたことになります。

その後やがて親しいお友達の聖覺法印といふ方、この方は矢張り法然上人の弟子でありますて、この方が唯信鈔といふのを書き遺しておいでになりますが、親鸞上人はこの唯信鈔を非常に大事に考へておいでになつたのであります。その聖覺法印といふお友達に導かれて法然上人の吉水の御庵室にお出でになる、そうして今度は又法然上人のお膝下に毎日降る日も照る日もかかさずお通ひになつた、そうして始めて御信心が開かれるといふことになつた、こういふ次第であります。それで親鸞上人はこの青年時代に聖德太子のお墓の偈文への感激がもとになつて、それから十年間ばかりたつた頃に今の六角堂に參籠して聖德太子の御精神を感じて、それからお友達の聖覺法印に導かれて法然上人の御教を受けに毎日毎日百ヶ日お通ひになつて、とうとうこのお念佛の道に徹底なさつた、念佛の御精神が徹底してきた、こういふ順序にな

るわけであります。これから親鸞聖人は叡山をすつかり離れます。て法然上人の弟子としておいでになる、こんな順序であります。

—以下 次号記載—

わが兒

故・波岡茂輝

学校の教をうけず立てるこそ尊き人と思ひなせる兒
親我はただにすぐれし教へ子を片より愛すと思ひなせる兒
父我的言葉は某の書にあるを独創の如く言ふと思ひなせる兒
中学を卒へなば直に自らの活くべき道を探すちふ吾兒
新作法なまめけなる吾兒の音づれに一度はよみゆくままにくみこそすれ行末にそこばくのたづきあらんかと思ふばかりに教うけしむ
予の文に心いかりし吾が愚、吾兒は十八未だ若しも

喜びものぞみもかけて生きにしを吾兒家出しぬ何にか生きむ
吾が心のつれなかりしかと家出せし子を思ひつつ省みするも
家出せし子の書きおきのいぢらしさ再び見むに堪ふべくもなし
ひそやかに吾兒がやきにし文がらを拾ひて見れば日記もありけり
ラヂオ聞けど我が慰まず草取れど猶慰まず吾兒を思ひつつ
今朝はしも雨降りいでぬ傘なき子いづくの空をぬれつかゆく
吾が心いかなれば子に通はざる隔て心の吾があらなくに
よし汝はいかなる罪を重ぬとも親なれば吾が汝をすてめや
久々に子は帰るとて葦をうで襷にて待ちわぶる妻
母の愛いかにたふとき飲ませずばやまれぬ乳を胸にたくはふ

尼提の救濟

蓬戸閑人

ニ提は極めて貧しく、至つて嘆しい身分に生れ、舍衛城内にあつて毎日人に雇はれて除糞を業として暮してゐた。

時に釈尊は舍衛城外の祇園精舍に居られて時々城内を遊行せられてゐた。佛陀を仰ぎ見てまつる人々は皆大歎喜にあふれ、畜生さへも悦び樂んでお迎へした。

尼提は内心深く佛陀を恭敬してゐるが、何分にも毎日糞器を背負ひ全身惡臭の満つる身とて、佛陀の歩まれる道を汚し、惡臭の道にただよふことをおそれて、佛陀の遊行と聞くとすぐ道を異にして遙かに他の巷に走り去つて、遠く地に伏して佛陀を拜し奉つてゐた。

「自分は過去において福德を造らず惡にひかれて今世にかうした苦を受けねばならぬ。そのため遭ひ難い佛陀の御出世に遭ひ乍らも、人々のやうに佛前に出来ないとは何とした悲しいことであらうか」

と独り悩み苦しんで心を焦くばかりであつた。

佛陀は遙かに尼提の苦惱を知ろし召されて、尼提救濟の時到れりと感じ給うて、尼提の道を異にしてある所に現れ給うた。尼提は恐れ怖れて再び異巷に避けやうと走つた。然し佛の大悲は平等にして随逐して捨て給はず、彼の巷に現はれて尼提の前に立ち給つた。尼提は三度異巷に急ぎ去ろうとして

ててやまぬ尼提を憐れまれて、手を挙げて招き給うた。その御手は纖長であり、爪は赤銅の如く、掌は蓮華のやうであつた。尼提は餘人ならず、我が名をお呼び下されることに氣付き、恐懼ただ佛陀の慈容を仰いで合掌するのみであつた。且つ懺し且つ怖れる尼提に向はれて、佛陀の慈悲は限りなく注がれて

「尼提よ、汝は身分の賤しいのをさけすみ、身の貧しいのを歎いて、我が遊行の道を避けた異巷に走つてゐるが、今日こそ汝の垢穢を洗除し、悲歎を救はんが爲に、汝の前に現はれたのである。」

「世尊よ、世尊は金輪王の種にまします。御弟子も皆貴人であります。私如き下賤弊惡の至極のものがどうして御仲間に容れて戴くことが出来ませうか」

と尼提の心は堅く閉ざされてゐた。佛陀は語をつがれて、「無限の淨水は能く一切の垢穢を洗ひ清める、また大火は能く一切の薪を焼き尽すことが出来る。種姓は仮りの定めであり、貴賤貧富はゆめのわかつである。佛道の眞実の火は一切の惡差別を焼き、佛道の清淨の水は平等一味であつて一切の惡業の垢穢を洗ひ除く力がある。」

見よ佛は尊貴のビンバ・シヤラ王のみを選ばず、下賤のヴァリを度す。富者のスダーナの爲のみにせず、また貧窮のスラダを度す。大智の舍利弗と共に鈍根のハントクの爲に説く。多欲のバナンダ、幼稚のスダナ、憚慢なバカラ、極惡のオウクツマをも度す。

「自分は汚れ穢れた身である。佛陀は淨く香潔にまします。どうしてこのやうな下賤の者が佛に近づき得ようか。若し近づくなれば罪をかうむつていよいよ深く重い惡業をおかすことにならう。」

とますますさけすみ恥ぢて、あはてふためいて廻避しようとしたが、あやまつて瓶を壁に打ちつけて破り、糞汁はあたり一面に流れ、尼提の衣服を汚して了うた。そこで顔色は眞青となり、打ち震ひながら

「さきまでは穢いとはいへなほ瓶があつた。今は瓶さえ壊れて汚物がさらけ出されて了うた。もうどうしやうもない」と万事休して佛陀に合掌して白し上げた

「どうか道をおかへ下さつて、私の罪をおゆるし下さいませ」

その時、佛陀は大慈、心に満ち、御顔は悦びの色に溢れ、尼提の側に寄られてやさしい御声で彼の名をお呼びになつた。

然し尼提が思ふには、「佛陀は三界の尊者でまします。どうして自分の様な鄙賤の者の名をお呼びになることがあらうか。きっと自分と同名の餘人を喚ばれたのであらう」と。そこではててきよろきよろとあたりを見廻した。

佛陀は彼の卑下におちた心を深く察し給ひ、佛心をもへだ

出家の人の爲のみにせず在家の人々をも救ひ、盛壯のライダワラのみならず老衰のラクラの爲に説く、貞婦ベイシャリの爲のみにせず、亦姪女蓮華色のために説く。云々」

尼提の卑屈におちて堅く閉ざされた心も、佛陀の慈心に触れ、慈語に潤うて。心大にひらけ、隨喜の涙と共に心の垢穢は洗ひ去られた。

佛陀は阿難に命ぜられて、彼を城外の大河水に沐浴せしめられ、ひきいて精舍に至らしめて、更に經法を説き給ふや、霍然として彼のこころはとけてさとりに人つた。

この噂は各地に風のやうに伝はつた。王侯の一人がこれを聞き、「これは困つたことだ。佛弟子とあれば王侯も礼せねばならぬ。然るに昨日まで除糞を業とした尼提、下賤の種の彼を礼することは出来ぬ。若しうはさが眞実であれば佛に乞うて取り止めて貰ふ外はない」と考へ威儀を整へて精舍にまわされた。

精舍の門前に端然として立つ一人の比丘に王は礼をして佛陀の在否を質すと、比丘は懇ろに答へて佛所に案内した。

王は事の始末を佛前に白し述べると、佛陀は莞爾として微笑せられつつ、

「それは噂だけでない事實である。今是所へ案内した比丘こそ尼提である」

とこたへ給うた。王は卑屈のすでに洗ひ去られて端正にして悠然たる尼提の自然の徳にうたれて、かへす言葉もなく、恐懼して佛前を退いたといふことである。

編集後記

世界は米ソの両勢力に二分され、独乙は東西に、朝鮮も南北に二分され支那も亦中共と國府に分離して、対立している。全世界が人間の一身体の如くなつて、そこに存在する各国が大は大なりに、小は小なりに、或は手となり足となり眼となつて身体全体を護り、然もいづれもが必要缺くべからざる機能をもつ存在として抜け合ひ調和される時は來ないものであらうか。

講和の調印近き日、世に求め人に求める前に私は一介の病野僧として、聖徳太子と親鸞聖人によつて提唱せられた誓願一佛乘の光を自身に頂き、この千三百年来てさ節によつて誓願された日本が、世界に必要缺くべからざる光明の発露する機能を全分に發揮する時を願つてやまない。賢智は人体中の極く小さい部分であるが、全身をめぐる血液の老廃物を除去して新鮮な血液に清浄化さす機能を持つ。僅かに四州に局限された東洋の四小島にすぎぬ日本であるが、誓願一佛乗の大切な機能の働く場所として大切にその使命をはたして行き度いと思う。

二六年、八月二〇日

△「聖親鸞を語る」の福島先生の原稿は愛知縣知立町での御講話の速記であります。先生が廿六歳の頃から六十三歳の今日まで常に親炙して來られました聖人の德風に浴し得ますことは、かへがたきよろこびであります。不本意乍ら原稿を二回に頒ちました。御味饒願ひます。

(◎)

(◎)

(◎)

(◎)

△「超生のひかり」は前月号に續き、真夏の赫光の下にあつて、我身に教へられますことをもを誌しました。

△「尼提の救濟」は自ら卑下して佛へててやまぬ私の心に温い慈光をしみ透らせて下さることであります。まだ薬瓶を持つ間は走り廻るのですが、すでに薬瓶の破れて全身濡れ、衣物にぬみれ、それが點綴にござられないであります。

道徳的修養の世界では、あれが悪いこれが悪いで部的悪であります。超生の光明に、照らし出される我等は、全面を暁でぬりつぶした紙同様の我等を知らしめられ、そのまんまで無限の慈悲と光明の中に包まれて参るのであります。

名古屋市南区駒上町二ノ二八

編集兼
発行人 花田正夫

定価 一部金拾五円（郵税共）
一年分金百八拾円（郵税共）

昭和二十六年九月十日 印刷
昭和二十六年九月十五日 発行
毎月一回十五日発行

名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人 本田政雄
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷所 千草印刷所
名古屋市南区駒上町二ノ二八

一道会館

發行所 慈光社
振替口座番号 名古屋一〇四七〇番

十月から第一、第二、第三日曜の午後一時半から一道会館で例会をいたします。又毎月十五日夜六時半から市内中区新栄町五丁目の宗田寺で信仰坐談会を開き、毎月二十四日は昭和区小櫻町二丁目の教西寺で午前午後の例会に出席させて頂きます。

花田記

慈光第三卷第九号 昭和二十六年九月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十二日 第二種郵便物認可